

佳作

目の見えない人

宮城県 白石市立白石第一小学校三年 杉嶋 亮飛

「くらい！」

目をつぶった時に思わず出たぼくの一言です。

親子行事で、目の見えない人の生活は、どのようなのかを体けんしました。目にタオルをまき、白じょうというつえを使ってしょうがい物をよけ、目的地まで行くという内容のものでした。あるく道も、しょうがい物もあるていど見て分かり、となりには母もいて、声も聞こえるので大じょうぶだろうというそんなかるい気持ちでいました。じっさいにやってみると、まっすぐあるいているつもりでも、ふだんどおりあるくことはできませんでした。目が見えない人はものすごく大へんだということが分かりました。それと同時に見えないということに対してこわさも感じました。

先日、まったく目の見えない山田さんという方に

話を聞くきかがありました。山田さんは頭のびょう気で二十九才の時にとつぜん目が見えなくなつたと話していました。それをきいて、ぼくはおどろきました。「ぼくもとつぜん見えなくなつてしまつたら：」そんなぼくの思つた心の声とはよそに、山田さんは、明るく色んなことを教えてくれました。

たとえば、くつ下の色を左右ちがつて外出したり、家の中のはしらに頭をぶつけてしまつたりと、わらつて話してくれました。そのほかにも、お金をさわつただけですべて分かることや、足音をきいただけで家族の人をあてることのできるということをお話してくれました。色々なことを教えてくれた山田さんという歌です。この歌をうたつたら、山田さんはなきました。ぼくはそんなすがたを見て、「どんな気持ちでいるのかな」と考えました。歌の中に出てくる、ゆうきもとう、あきらめないで、どんなつらいときも、かなしくてなみだがこぼれたとしても思い出に、大きな声で歌おう、どこまでもとんでゆけ、ぼくのゆめをのせて、空高く、みらいへ。どの歌しがひびいたのでしょうか。それともぼくたちの歌声にうれしくなつたのでしょうか。

山田さんのように目の見えない方に出会えてよかったです。なぜなら、ぼくは目が見えない人のことをぜんぜんしらなかったからです。ぼくが思っていたいじょうに明るく前向きでした。ぼくはこれから目が見えない人に会ったらたすけてあげたいです。